令和４年度

第38回

青少年の主張

★伸びよう 育てよう 羽後の青少年★

よその
うちの
社会の
子。

彼らももうすぐ立派な社会人。
うちの子も、よその子も共に明日を築くパートナーです。

青少年育成羽後町民会議

いつか握手を取り戻すときに

青少年育成羽後町民会議
会長　沼澤晴夫

小学校で学級担任をしていた昭和の終わり頃の話です。ズボラな自分ゆえ、毎日必ず全員に声をかけるということを忘れないために一つの方法を考え付きました。帰りの会の挨拶が終わった後に、一人一人と握手をすると決めたのです。もちろん授業中や業間等に気軽に触れあっていたつもりでしたが、今風に言えば、その決まり事を一つのセイフティネットのように考えていたのです。手前味噌ながら、一定の効力として機能していたように思い出せます。

さて、私達がコロナ感染予防のために「握手」行為を失ってからもう三年が経とうとしています。握手の起源は、「武器を持っていない」という証拠に右手を開いて差し出すことから始まったという説があります。その言に倣えば私たちの手はまだ、危険なモノにまみれているのかもしれません。それを消すために、この後何度消毒液を吹きかけたらいいのでしょうか。また世界に目を向ければ、今はどうしても握手できない状況を持つ国同士の存在が頑なさを増し、我が国も他人事として観ていることは困難になってきています。

青少年が健全に育ち社会を背負っていく存在として独り立ちするためには、他者理解と協調の精神は欠かせません。それを身体行動として具現化する握手という行為は、グータッチや肘を使った接触などに代替されています。もちろん我が国が大切にしてきたお辞儀、それから万国共通に近い笑顔など、身体を使ったコミュニケーション手段はまだまだ多くあり、それらを含めて上手に活用すべきでしょう。しかしやむを得ないと考えつつも、握手の持つ暖かみや強弱に込められた心の表現が、今ことさらに懐かしく貴重に思えてなりません。

コロナ感染予防対策は、国ごとの対応レベルに違いが生じてきて、迷いつつ進んでいる状態と言えます。正直、いち早く脱したいと逸る気持ちを消すことはできません。しかし拙速な動きが取り返しのつかない未来につながる危険があるとすれば、理性的な判断は依然として強調されるべきでしょう。その状況を踏まえつつ、握手の持つコミュニケーション特性をどう発揮するか。単純ですが、それは一つ一つの挨拶行為に「心を込める」ことではないでしょうか。心を込めて言葉を発し、心からの笑顔を送る・・・そうやって他者へ思いと温かい気持ちを伝えていくしかありません。目に見えなくともそういうコミュニケーションが続けば、いつか私達が握手を取り戻したときに、より一層心の通い合う行為として機能するのではないでしょうか。辛抱強く向き合いたいものです。

今年も小学生から高校生まで、それぞれ心を込めて書かれた作品が揃いました。各年代によって、テーマが家族、地域社会、学校そして国全体や世界・・・様々な場への広がり、深まりが感じられる冊子となりました。どうか最後までご精読いただき、青少年の現在を理解しながら、困難な時代の子育て、教育のための参考にしてほしいものです。

終わりに町当局、教育委員会、応募された各学校をはじめ多くの地域の皆さんに感謝申し上げ、巻頭の言葉と致します。

「青少年の主張」発刊に寄せて

羽後町教育委員会
教育長　大久保　聰

青少年育成羽後町民会議の皆様には、これまで長年にわたり子どもたちの健全育成にご尽力をいただき、心よりお礼を申し上げます。おかげさまで羽後町の子どもたちは、感受性豊かで、思いやりと創造力に満ち、そして何事にも生き生きと取り組むたくましい子どもに育っております。本当にありがとうございます。

今年も新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、学校や地域の様々な行事が中止や規模の縮小を余儀なくされる一年となりました。この青少年の主張の発表会も昨年に引き続き、特選者のみの発表となりましたが、後から入選作品はすべて読ませていただきました。家族や友人との関わりから感じたことや考えたことを題材にした作品が多く、子どもたちの感性の鋭さに感動するとともに、そこから命について考えたことや自分の将来にまで思いを広げている姿に元気をもらうことができました。特に、羽後中学校一年の稲富さんの発表では、母子の絆やそれを支える周囲の子どもたちの温かい言葉に、目頭が熱くなりました。

さて、羽後町では小・中学校連携の下、「魅力ある学校づくり」を進めています。これは、学校での授業や様々な行事、体験活動等を通しながら、子どもたちの自尊感情（自分を大切な存在、価値ある存在として認めること）と自己有用感（自分は他の人の役に立つまたは他の人に喜んでもらえる存在だと気づくこと）を育てるために、子どもたちの絆づくり、居場所づくりを進める取り組みです。

これまで、我々大人や教師は子どもがやってみたいと思うことや子ども自身の力でできそうなことも、経験を元にこうした方がいいなどといらぬ助言をして、結局は大人の思い通りにやらせてしまっていたのではないかと思います。先回りして教えるのは、子どもの感動の瞬間を奪うこととも言われます。

学校においてもまた家庭においても、上に立つのではなく横で見守る教師や大人となって、大いに子どもたちの自主性や主体性を尊重し、感動や成就感を味わえる機会を増やしていきたいものだと思っています。

最後に、これからも、温かい家族、魅力ある学校、そしてそれを優しく包み込んでくれる地域社会が一体となり、チーム羽後町として子どもたちの健やかな成長と、「生きる力」を育んでいくことができますようお願い申し上げ、お祝いの言葉といたします。

や主体性を尊重し、感動や成就感を味わえる機会を増やしていきたいものだと思っています。

最後に、これからも、温かい家族、魅力ある学校、そしてそれを優しく包み込んでくれる地域社会が一体となり、チーム羽後町として子どもたちの健やかな成長と、「生きる力」を育んでいくことができますようお願い申し上げ、お祝いの言葉といたします。

もくじ

■はじめに

■「青少年の主張」発刊に寄せて

【小学校低学年の部】

・特選「友だちになりたいな」……1
三輪小学校二年　中村心奏

・入選「おばあちゃんはすごい」……1
羽後明成小学校一年　柿崎琉生

■審査講評《小学校低学年の部》……2

【小学校中学年の部】

・特選「だれもが住みよい町をめざして」……3
三輪小学校四年　佐々木菜帆

・入選「バリバリのおじさんってかっこいい」……4
西馬音内小学校三年　仙道崚真

・入選「生き物が元気に育つ環境をめざして」……5
三輪小学校四年　佐々木颯

■審査講評《小学校中学年の部》……7

【小学校高学年の部】

・特選「命をかがやかす」……8
羽後明成小学校五年　髙橋彩心

・入選「見た目やイメージにとらわれず」……9
高瀬小学校六年　佐藤瑠香

■審査講評《小学校高学年の部》……11

【中学校の部】

・特選「一つの言葉から…」……12
羽後中学校一年　稲富一華

・入選「平和への願い」……13
羽後中学校二年　伊藤愛菜

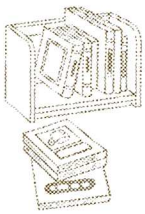
・入選「一人の人間として」……15
羽後中学校三年　阿部向日葵

■審査講評《中学校の部》……16

【高校の部】

・入選「堂々と好きと言えるように」……17
羽後高等学校三年　細谷響子

・入選「命の大切さについて」……19
羽後高等学校三年　柴田実紀

■審査講評《高校の部》……20

■佳作者一覧……21